

小麦「ふくほのか」の製めん加工適性を高める施肥法

「ふくほのか」の子実タンパク質含量を製めん加工に適した9.5%以上にするには、一般的な水稲後のほ場では、3月上旬までに窒素肥料を成分量で15kg/10^{アール}、さらに開花期追肥（5月上旬）として3~4kg/10^{アール}施用する必要がある。堆肥連用等の地力が高いほ場では、出穂期までの施肥量を12kg/10^{アール}程度に減らす。

内容

「ふくほのか」は、収量性や外観品質に優れるが、子実のタンパク質含量が低くなりやすい。そこで、製めん加工に求められる9.5%以上の子実タンパク質含量を得るための施肥法を検討した。

施肥体系は、基肥・2月追肥・3月追肥の順に、化成肥料の分施肥体系では5kg・5kg・5kg、肥効調節型肥料を用いた省力体系では11kg・4kg・無施用と、窒素成分総量を15kg/10^{アール}に設定した。また3kg/10^{アール}を開花期に追肥する区を設けた。供試ほ場は、前作が水稲の稲わら全量すき込み及び堆肥連用の2ほ場とした。その結果、稲わらすき込みほ場では520~562kg/10^{アール}、堆肥連用ほ場では663~762kg/10^{アール}の収量が得られたが、堆肥連用ほ場の一部で過繁茂による倒伏がかなりみられた。また、稲わらすき込みほ場では、窒素成分で3kg/10^{アール}の開花期追肥で子実中タンパク質含量が増加したが、目標とする9.5%にはわずかに及ばなかった。堆肥連用ほ場では、開花期追肥をしなくてもタンパク質含量9.5%

以上の値となった（図）。

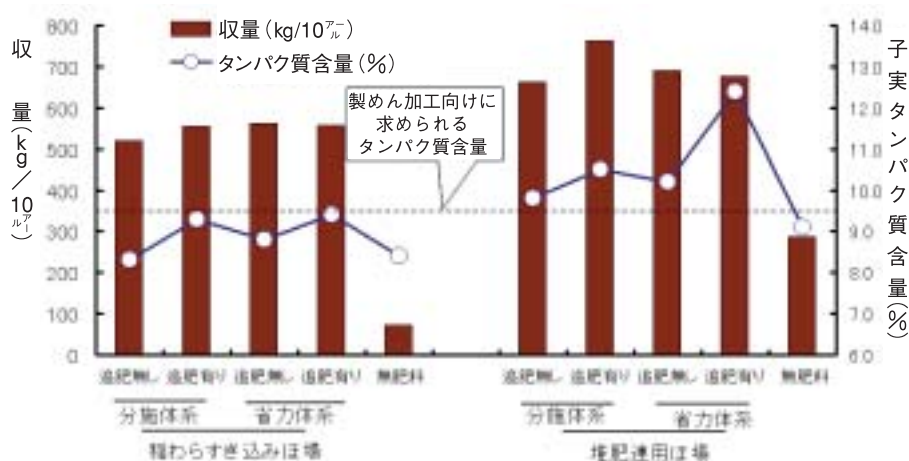
以上の結果から、収量性の高い「ふくほのか」は、一般的な水稲後ほ場では3月上旬までの窒素施肥量15kg/10^{アール}の多肥栽培で十分な収量が得られるが、子実タンパク質含量9.5%以上にするためには、生育量に応じて開花期の窒素追肥を3~4kg/10^{アール}施用する必要がある。堆肥連用ほ場では、^{かん}稈長85cm、穂数500本/m²の生育量をめやすに出穂期までの肥料を減らし倒伏を回避することで、高収量かつ9.5%以上の子実タンパク質含量が得られる。

普及上の注意事項

「ふくほのか」は、3月中旬から4月中旬にかけて追肥すると稈が伸びて倒伏しやすくなる。したがって、出穂前の追肥は3月上旬までに実施し、その後は、開花期追肥（5月上旬）で窒素成分を補う。

牛尾 昭浩（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2410）



土壤条件や開花期追肥の有無がふくほのかの収量、タンパク質含量に及ぼす影響